

試行錯誤

別冊代わりに読む人

⑥

小説へと向かう

巻頭言 小説へと向かう 友田とん

わかしよ文庫 大関の書いた小説を探して ③

ついに発見、「美人の薄命」!

大正時代の雑誌『國技』に大関の小説が連載されているのを見つけた。そこには強い大関像からは想像もできない、由緒正しい華族令嬢の恋愛が描かれていた。

伏見瞬 蓮實重彦論 ⑥

蓮實重彦はずっと同じことを言っているわけじゃない。

1970年と1988年に蓮實重彦が書いた映画についてのテキストを比べ、価値基準や氏の特徴と信じられている文体の変化を示す。その違いを生んだ要因とは?

スズキナオ 谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する ④

芦屋の砂浜で猫を見た

谷崎潤一郎記念館を訪ねた著者は、近くに住む友人を誘って海辺へと散歩する。公園で猫の世話をする人を見かけて、谷崎のある小説を思い浮かべるが……。

陳詩遠 なにがなんだか ⑤

新米教員日記

マイペースで研究をやっているとしていたら突然新米教員になってしまった。ラボ運営に授業、研究費の獲得、合間を縫っての研究。めまぐるしい日々にも時折、小説的場面が訪れる。

友田とん だいたいアンザン (短篇小説)

仕事で赴いた町で丘の斜面に並ぶ集合住宅の戸数を数える「私」は最近、暗算する能力が低下していることに気づく。通っているスペイン語教室の友人に打ち明けようとするが……。日常から数学へと至る「数学小説」第1弾

小説へと向かう 友田とん

久しぶりに会った友人と話したり、また本を販売するイベントに出店してお客さんと話したりしていると、

「小説は読まない、エッセイは読むけれど」

という声を最近よく聞きます。小説は長年好きで読んできたから、それはさみしくもあります。面白い小説がたくさんあるよと伝え、ぜひともめいめいが自分の小説を見つけて楽しんでほしいと思います。けれど、かく言う私も自在に小説を読みふけているわけではありません。なかなか小説が読めないのです。なかなか思うようには読めないが好きである小説とはなんなのでしょう。か。

直接間接に関わらず、近しい人の書いた日記やエッセイならまだしも、見ず知らずの人の書いた小説を手取ることにはハードルがある。この今いる現実からそれなりに距離の離れた時間、場所を描く。しかもそれが必ずしも直接の当事者

によるものでも、また第三者によって客観的に書かれたのでもない。ある語り手による、そうせざるを得ないような語り方で語られたものである時（しかもその理由が明かされないまましばらく読まなければならぬなら）、そのなかに分け入っていくには、まとまった時間の余裕や辛抱や信頼（しかも見ず知らずの人への！）というものが必要でしょう。またそれが自分に必要な小説かどうか、その時の自分と合うかどうかは、読んでみないことにはなかなかわかりません。そのようにして、人々の小説との距離が一層開いていっていると思います。

だからと言って、小説が必要なくなったということではまったくくないと思うのです。おぼろげな記憶で恐縮ですが、かつて数学者の森毅は未来の社会では、ほとんどの仕事は機械が代わりにやってくれるようになり、人間は自然に囲まれた場所で詩だけを書いて暮らすようになるだろう、と書きました。当時から小説を書きたいと願っていた学生の私は、詩に小説を加えつつ、好きに創作して暮らす未来を、喜ばしいこととして受けとめていました。ところが、今私たちを取り囲む世界はめまぐるしく様変わりしていて、それを受け容れざるをえず、またさまざまなものと否応なく関わることを強いられている。確かに多くのことを機械がやってくれるようになったけれど、そこでは、むしろ詩や小説を創作しつづけて

いかなければ、取り巻く世界を自らの目で捉えられないような状況に置かれているのではないかと思うのです。もちろん、私はそのことが創作するものにとって、切実だけれど喜ばしいことであることに違いのないと思っています。何しろ、想像力を働かせ、まだ見ぬものを見、言葉にすることで、見えていないものを見ようと試みるのが、生きるために求められているからです。

そして、それは小説を書く以前に、小説を読むことによってもたらされると思います。というよりも、書くことと読むことは相反することではなく、想像力を働かせてわずか先を予測しながら読むことは、実際自ら頭の中で書いていることに他ならない。だからこそ小説にぐっと入り込んで、その小説の世界を味わえた時の喜びもまた大きいです。異なるものを単に他人ごととも自分ごととも違うものとして読み、ある瞬間には読んでいるはずの自分がまるで書いているかのような錯覚を覚える。そんな驚きの体験ができるのは、私にとっては小説以外にありえないような気がしています。まもなく小説の時代が来るとどこかで信じています。

ところが、それほど魅力的であるのに、この日々の暮らしから、地続きに小説へと至る道や回路がないとも感じます。さまざまな工夫がなされているのは承知

していますが、わかっている人だけが味わえばいいとばかりに、作品だけぼっと差し出されると、まるでファミコン本体を持っていないのに、カセットを渡されたような感覚に陥ります（喩えが古いですが）。せっかくの小説を味わうための道がうまく用意されていないことは、もったいないことだと思います。昨年、編集・出版した青木淳悟さんの小説集『憧れの世界——翻案小説を書く』も、やはり同じような問題意識から著者と相談の上で、小説執筆の動機や経緯を書いたエッセイと、創作の過程を綴った自作解説を、小説と併録するという形を取りました。これは日常から小説へと至る道を一冊の本の内側に、著者自身に作り込んでもらうものだったと言えますが、道を内蔵することはかりが、小説へと人を連れていくものではないかもしれません。接岸できずに沖合に停まる船舶に港から向かうランチを作ることや、ランチで行き来する姿をただ見せてもいい。ただ道を行くことを示す、つまり読んでいることを伝えることだって、人を小説へと導くことができるでしょう。そうした小説へと向かうことを可能にするものはもっともっといろいろな形があるだろうとも考えています。

別冊代わりに読む人『試行錯誤』は、もともとエッセイや批評の試行錯誤の場としてはじめたものです。ところが二年近くやってきて、気づいてみれば随分

と小説へと向かってきたという感じを受けます。掲載しているものは今でもエッセイや批評が中心ですが、わかしょ文庫「大関が書いた小説を探して」、スズキナオ「谷崎潤一郎を読みながら散歩する」は気づいてみたら、小説や小説家が主題になっていました。これらはまさに小説を読んでいくことで小説へと向かっていくものです。また、陳詩遠「なにがなんだか」は研究者の日々が綴られているのですが、小説的な場面がしばしば描かれるようになりました。これは日常の延長に小説があることを示してくれるものです。いかにして蓮實重彦のスタイルが成立したかを追究する伏見瞬「蓮實重彦論」にもやはり物語・小説との関わりが示唆されています。編者である私自身いつか小説を書きたいと願いながらエッセイを、しかも小説を読んでいるエッセイを書いてきました。そうした小説へと向かう姿勢が冊子の内容の変化にももちろん影響しているでしょう。小説を読んでみよう、とか、小説が面白かったと感じる人がここから生まれてくれたらいいなと思います。今回、私は日常の思考から地続きに数学があることを体感できるような小説、「数学小説」なるものを試作しています。

大関の書いた小説を探して

（「大相撲観戦記」より改題）

わかしょ文庫

第3回

ついに発見、「美人の薄命」！

(前回までのあらすじ)

およそ110年前の大関、伊勢ノ濱が書いた小説を探していたわかしよ文庫。国会図書館や相撲専門の古書店でも手がかりを得られず、調査は難航していた。しかし、期間をあけてから再度国会図書館を訪問すると、当初は貸し出されていた雑誌、『國技』が返却されており、なんとそのなかに伊勢ノ濱の小説が掲載されているのを発見したのだった！

伊勢ノ濱の小説は「美人の薄命」というタイトルだった。早速、『國技』に掲載されている「美人の薄命」の掲載ページすべての複写依頼を出す。『國技』のバックナンバーは国会図書館に収蔵されていない号も多く、全十一回の「美人の薄命」の複写は、第壹、第二、第五、第七、第九、第十、第十一と、残念ながら歯抜けになってしまった。

早速、『第壹』と冠された回を読み始める。冒頭には説明文がつけられている。

本編は、今の太閤伊勢ノ濱慶太郎君が、入幕間もなき、去る明治四十年頃、飲酒を廢止してより、巡業中の無聊を慰せんが爲め、旅窓に筆を執りしも

の、當時余が、三州豊川の旅宿に訪れし際、請ひ得て篋底に藏せしを、今、讀者に割愛して、興趣を分たんとするものなり、標題及び署名は同君の自署にして、文章は、一字一句も加除を爲さざるなり。

(竹内 撰 堂 附 記)

竹内撰堂は別名(本名?)を竹内麟也といい、時事新報社の相撲主任を務めたのちに独立して『國技』の主幹になったらしいのだが、主幹とは編集長のような役職だったのだろうか。伊勢ノ濱がお酒を断ち、小説を巡業中の趣味にしたというのは、『試行錯誤4』で紹介した『名流百道楽』にもあったとおりだ。「文章は、一字一句も加除を爲さざるなり。」のあたりに、「どうだい、本当の本当に大関が小説を書いているんだぜ。すごいだろう」とでも言いたげな撰堂のドヤ顔が浮かんでくる。当時としても大関が小説を嗜み、さらには自分で書いてしまうなんてよほど予想外のことだったのだろう。

掲載に至るまでに、きつとこんな経緯があったのではないだろうか。全国津々浦々の巡業に密着取材している竹内撰堂。旅館でいつものように親しげに大関と雑

蓮實重彦論

伏見
瞬

第6回

蓮實重彦はずっと同じことを
言っているわけじゃない。

1. 言い忘れていたこと

前回の連載で、蓮實重彦が「運動」を映画論に実践する例として『ハリウッド映画史講義…翳りの歴史のために』を取り上げました。前回を軽く振り返っておくと、蓮實にとつての「運動」とは、曖昧に共有された規範を蹂躪する動きです。誰もがなんとなく「こういうお約束だよね」と考えているイメージを破り捨てていくアクション。定められた規則を破るわけではないが、その規則の限界ギリギリを狙う運動こそが、スポーツや映画の魅力になる。それが蓮實の立論でした。

ところで、前回言い忘れたことがひとつありました。蓮實は、時期によって文章がかなり違います。

「人間なんだから時期によって文章が違うのは当たり前だろ」と言われれば確かにその通りなのですが、しかし、蓮實重彦に関しては何かずつと変わらない、不変の重みみたいなものを感じている人が多いのではないでしょうか。揺るぎない確実な知性のようなイメージが蓮實にはあって、巨大に膨れ上がった権威性はそこから来るように思う。ですが、ちゃんと読んでいけば異なる言説を彼が唱えていることもわかるし、あの特徴的な文章も時期によって変化しています。

2. 「見えないもの」の変化

『ハリウッド映画史講義…翳りの歴史のために』は1993年に筑摩書房から刊行されており、元々は季刊誌『リュミエール』に1986年から1988年にかけて連載されたものです。前回紹介した「神話都市の廃墟に」という文章は『ハリウッド映画史講義…翳りの歴史のために』の3章に当たるもので、1988年に刊行された『リュミエール』第13号に掲載された文章が元になっています。これと比較したいのが、『蓮實重彦の映画の神話学』（泰流社、1979年）に収録されている、「映画・この不在なるものの輝き」と題された文章です。こちらは元々「海」の1970年4月号に掲載されたものです。書かれた時期を比べると、間に18年の月日が流れています。

合わせて読んでみると、その文章の違いに気づくのではないのでしょうか。もちろん、この文章は論じている主題が異なります。「映画・この不在なるものの輝き」の主題は映画と批評の関係であり、映画に関する原理論を含んでいます。対して「神話都市の廃墟に」は、「ハリウッド映画」と呼ばれる対象の歴史性について語ったものです。両者の批評対象は異なりますが、映画にとつての「見えないもの」を

扱った点では類似しています。

「映画・この不在なるものの輝き」にとつての「見えないもの」は、例えば以下のような文章に集約されます。

われわれの周囲の空間にはたえず映画が充満しきっており、おびただしい数の作品群がたがいにせめぎあっているはずでありながら、いざ瞳をこらしてみると、いままたように厚い暗闇が地平の尽きる地点にまでたれこめていて、映画の姿などどこにも見あたりはしない。というよりもむしろ、われわれがふつう映画だと信じこんでいるものは、実は遥かに捉えられるその臍げなうしろ姿でしかなく、いままさに地平線のかたに没しようとするその瞬間に、われわれの視線が達することのない地点に氾濫している光をうけて闇の中にはなつ束の間の輝きでしかないのだから、この一瞬の残像とわれわれとの間に口を拡げている深淵は、文学作品の読者と活字のつらなりとをひききしている距離がそうであるように、ひたすら無限大であることをやめようとはしない。

『蓮實重彦の映画の神話学』（泰流社、1979年）p. 15

この引用で語られている状況は、実はかなり常識的なものと判断されます。「いざ瞳をこらしてみても、（中略）映画の姿などどこにも見あたりはしない」というのは、映画は観た瞬間に消えてしまう、映画館の上映が終わると、目の前には白いスクリーンが広がるばかりで、「映画」の存在などどこにも見当たらなくなってしまう。映画は、「見えないもの」になってしまう。そういう、映画館で映画を観た人なら誰もが経験したことのある状況を示しています。

この文章が書かれた1970年はビデオによる複製が一般化される前であり、映画を観ることはイコール「映画館で映画を観ること」を表しているでしょう。映画の批評を実践しようとするものは、書こうとするその時には「不在」のものを相手にするしかない。記憶を頼りに「見えないもの」について書くしかないという、映画と批評の原理的な関係が、ここでは語られています。

一方「神話都市の廃墟に」で書かれるのは、原理的というより、歴史的な対象としての映画についてです。「ハリウッド映画」とは、単なる「アメリカ映画」ではなく、むしろアメリカ合衆国に反抗する「記号」であった。そうした記号としての

谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する

スズキナオ

第4回 芦屋の砂浜で猫を見た

よく晴れた日に芦屋へ向かう。家の最寄り駅から大阪駅まで行つて阪神線に乗り換えたら、阪神梅田駅から阪神芦屋駅までは20分ほどである。芦屋川をまたぐ電車のホームから川面を眺めたが、季節のせいなのか、すっかり千上がっていた。

駅の南口から外に出て、山側へ少し歩き鳴尾御影線という道路を右に折れ、ビルの地下の「鶏白湯RAMEN 芦屋 焰」という店でラーメンを食べた。鶏白湯ラーメンが好きでよく食べるが、ちょっと他に似たものの思いつかないような繊細な味わいのスープで、旨みもしっかりあるのどこか上品で、すっかり気に入った。隣のお客さんが「紅しようにくださいー」と、ラーメンが運ばれてくると同時に注文していたので、私も真似をする。小さな壺に入って提供される紅しようにをまろやかなスープに少しずつ入れて、味を変えながら食べる。卓上には「煮干し酢」という、酢の中に煮干しを漬け込んだものが置かれていて、それをスープにかけたら味わいがすすきりして、これもいい。しっかり食べごたえがあり、お店の方の接客も明るくていい感じで、「絶対また来よう」と思つて出る。

そこから15分ほど、南の方へのんびり歩いて「芦屋市谷崎潤一郎記念館」を目指す。記念館の入口前には大きな石が置かれていて、「この重さ十五トンもある巨石は、神戸

市東灘区岡本の旧谷崎邸にあつたものです。」と、その手前の銘板にある。

「昭和十三年、六甲の山津波が起り、芦屋川をはじめ各河川が氾濫して、芦屋も大きな被害を受けました。その情況は潤一郎の名作『細雪』に見事に描かれています。当時梅ノ谷と呼ばれた旧邸のあたりもすさまじい土石流に襲われました。この石は、その山津波で旧邸内に流入し、そのまま庭石として置かれ、五十年の星霜を経ました。そして、阪神大水害五十周年にあたる今年、谷崎潤一郎記念館の竣工に際し、旧邸の所有者文節智行氏のご好意により、この地に移されました。」

こんな大きなものが庭に流れてくるほどの土石流の激しさ、それがそのまま庭石になったという顛末の不思議さを同時に感じながら、手を伸ばして石に触れてみる。日差しを受けていたから、温かい。石が庭まで流れてきたのは谷崎潤一郎がその場に住んでいた頃よりも後のことだったようだが、石の表面を通じて谷崎潤一郎に挨拶を済ませたような気分になる。

600円の入館料を払つて中へ。展示を見る前にトイレに行つておこうと思う。トイレの手前の壁に「谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』をモチーフにしたトイレです」と文字があり、入つてみると、なるほど、照明は控えめで暗く、便器のカラーもブラッ

クに統一されている。黒いトイレを利用するのは初めてかもしれない。

メインの展示室内では『春の特別展「潤一郎、終活する文豪谷崎 死への挑戦」』が開催されていた。初めて来たので、展示されているもののどこからどこまでが今回の特別展に合わせて選ばれたものかわからないが、谷崎潤一郎の晩年の書齋が再現してある一角や、晩年の愛猫だったという「ペル」の剥製に目を引かれた。

室内の隅に設置されたモニターに映像が流れていた。『潤一郎と芦屋』というタイトルで、文字通り芦屋と谷崎潤一郎の関わりについて紹介するものらしい。モニターの前に置かれた椅子に座って、じっくり見てみることにする。1988年にこの「芦屋市谷崎潤一郎記念館」がオープンした際に、開館をPRする目的もあって制作された映像らしい。

映像は1987年10月、この記念館の建設が始まる前、神社で安全祈願をしている場面から始まる。「芦屋を第二の故郷として愛した文豪・谷崎潤一郎の面影をいつまでも市民の胸にと計画された記念館がいよいよ伊勢町、文化ゾーンの一角に建つのです」とナレーションが入る。

それから谷崎潤一郎が芦屋の地を舞台にして『細雪』を書いたことなどが説明され、

この記念館ができるのに当たり、谷崎潤一郎の三番目の、そして最後の妻である谷崎松子さんの協力があつたことが語られた。記念館ができる数年前、芦屋市で谷崎潤一郎関連の催しがあり、そこに松子さんが招かれたらしい。「今は神奈川県湯河原に住いの松子夫人はその時の思い出をこう振り返ります」というナレーションの後、当時の松子さんの姿が映る。

「東京の方から参りますと、とってもなんか、こう、なんて申しましたらよろしゅうございますかね、もう、なんか、気持ちが悪く落ちてくつていうようなね。ふるさとへやっぱり帰ってきたというような、そんな気持ちが悪いですね。とても強く。気持ちがゆつくりと、ゆつくりとしてしまうのね」と、おそらく当時のお住いの椅子に座った松子さんが言う。ゆつくりと、一言ずつ丁寧に語っている風で、言葉遣いや声色に柔らかなところがある。当時の人の言葉遣いというものはこうだったのだろうか、と思う（この映像が撮られたのはきつと1987〜1988年にかけてだと思われるので、当時の松子さんは84歳から85歳かだ）。

「記念館が建つことを喜ばれた松子夫人は故人の遺品の数々を寄贈することをお約束くださったのです」とナレーション。なるほど、この記念館に展示されているものの

なにがなんだか

陳詩遠

第5回

新米教員日記

ATLAS 実験の巨大加速器を使って陽子をぶつけまくってダークマターを発生させる生活に飽き、CERN（欧州原子核研究機構）を去ってはや3年。^{*}東京に戻って量子コンピュータという新しい世界に飛び込んだはずが、量子コンピュータはダークマターを検出する装置として使えることに気づき、ダークマターを探す研究をしている。物理をやっている身からしても意味不明な回帰の仕方であり、恐るべしダークマターの引力である。そして軌道に乗り始めたと思ったら今度はついに両方——ATLASと量子コンピュータでダークマターを探すことになった。

ことの発端は、京都大学のATLAS実験グループを率いていた前任者S氏が電撃的な民間就職を決めたことに因む。基本いつ会っても極めて樂觀的な印象のS氏が大学の給料の低さを糾弾するようになり、気づけば今をときめく量子コンピュータのスタートアップに移籍。スタートアップにも関わらず収入が云倍になる華々しい転身となったが、S氏が担当していた学生5人は指導者を失うため、新しい教員の公募が急遽出る運びとなった。自分のキャリアアステージ的にかなり背伸びした職位で、普通であれば落ちていたと思うが、それまでに共同研究者として当該学生らの面倒を見てきたという奇跡的な偶然と、先方との物理観のマッチングの良さも

あり、応募してみたらあれよと採用されしまった。いわゆる終身雇用であるが、それまで任期付き研究員として「いずれは研究を辞めるのだろう」とぼんやり思いながらその時が来るまでマイペースにやってくつもりだっただけに、ライフプランが激変する一撃であった。前任者が給与水準の低さにプチギレて辞めたところに就職したと思うと少し複雑ではあるが、一度はフェイドアウトするつもりでいたATLASに復帰し、やうに京都で量子コンピュータのグループを立ち上げる二刀流でいく覚悟を決め、昨年5月に教員生活が慌ただしくスタートした。

勤め先となる京大物理学教室・高エネルギー研究室は、京都市街の北東の端、銀閣の麓・北白川にある北部キャンパスと呼ばれる場所である。隣接する本部キャンパスは、その名の通り大学の本体部分で学生も多く、常に活気があるのに対し、北部はその喧騒から離れて実に穏やかである。授業中にもなると路上から人影がなくなり、静寂の中を木が風に揺れる音だけが響く。そして新緑が美しく美しい。北の端には農学部畑と牧場が広がっており、羊や馬がその辺をうろろしている中に、

^{*} CERNでの研究生生活については「解凍されゆく自身とジュネーブ近郊の地下で起こっている乱痴気騒ぎについて」（代わりに読む人0 創刊準備号）に収録）を参照。

物理の建物がぼつんとある。東は比叡山を望む好立地である。

北部は学生たちも、そんな牧歌的風情に影響されてか、どことなくマイペースに見える。建物の中庭でキャッチボールとかバドミントンをしているのをよく見かける。着任して初めて対面でまともにしゃべる自分の学生にも、会ってまず「フリスビーやりませんか」と誘われ、同室のもう一人の学生と3人で晴れた日の中庭で無心でフリスビーを投げ合ったときはさすがに心が躍った。前職にいた頃、研究室は「職場」という感じだったが、ここは「学校」である。学園祭も、本部で行われる本丸の学園祭と同じ時期に、北部で独自の学園祭を開催している。薪割り体験とかアヒルとのふれあいコーナーといった、我が道を行く渋い企画が結果しており胸を打つ。全体として自分が好きなものに集中することを促すような雰囲気が漂っていて、学問に没頭するには良い環境である。

京都に来て最初の仕事はATLASグループの引き継ぎである。指導者S氏を失って既に8ヶ月が経過した学生5人の集団は大海原を当てもなく漂う船のようになっていたのではという懸念があったが、フタを開ければ全くそんなことはなく、上の学生が下の学生の面倒を見る見事な自走体制ができあがっていた。聞くとS氏は以

前から放任気質であったので、学生による自走体制は今に始まったことではないらしい。自分は多分どちらかというと水をあげすぎて腐らせるタイプの指導者なので、この「なにもせずとも正解」という状況は斬新であった。一方で金銭面では、研究資金がないので紛れもないピンチ状態。出張したい学生は、学内や財団の奨学金に応募しまくって身銭を稼ぐというやばい自走体制もできあがっていた。どうにかしたいのは山々だったが、自分もそのときATLASに使える研究費を持っておらず、着任して最初の週は、奨学金の申請書に奮闘する学生に推薦状を書きまくる仕事でてんやわんやになった。

二

なるまで違いを強く意識したことがなかったが、研究員と教員というのは全く別の職業である。研究員はその名の通り研究が仕事であるが、教員はそれに加えて組織を運営するための仕事——いわゆる学務・教務・研究資金獲得活動からなる「BIG3」——が加わる。研究員が任期あり、教員が任期なしの雇用であることが多

短篇小説

だいたいのアンザン

友田とん

駅を出て、線路と垂直に交わる通りの商店街を歩いていく。信号で立ち止まった
ら、交差点の向かいの建物のはるか後ろに緑で覆われた小高い丘があり、その斜面
に規則正しく集合住宅が並んでいるのが見えた。

一、二、三、四。

一、二、三、四、五。

まるで段々畑に建てたみたいで、いちばん下の建物を倒せば、向こうの建物に
当たり、またそれが倒れれば、その向こう側が倒れというふうにして、やがて丘の
てっぺんの建物が倒れてしまう、ドミノのようだ。右側のドミノは四棟、左側には
五棟並んでいる。つまりドミノできそうな列は二列ある。むろん、ドミノのように
その建物に赤や黄や青の色は塗られておらず、かといって今時のコンクリート打
ちっぱなしのグレーでもない。装飾などまったくない、それなりの年月を経て古び
たそれらは反射でまぶしくはないような白い塗装がなされていて、これまでドミノ
倒しされた形跡はない。

信号を渡り、ゆるやかなS字を描く道路を歩きだすと遠くの景色は目の前に建つ建物によって遮られて、丘と集合住宅は見えなくなった。代わりに、二階建ての一軒家、三階建て、四階建てのマンション（一階部分は半地下の駐車場）、校庭と平屋の保育園、再び四階建てのマンション、下が駐車場になっている高床式のビル、天井に黄色のクレールが吊り下げられている平屋だが天井の高い自動車整備工場など新旧まちまちの建物が次々と視界に入ってくる。ほとんど無心でそんな観察をつづけていて、足に掛かった負荷で坂に差し掛かったのだと気付いた時には、目の前に斜面に建つ集合住宅の列が迫っていた。もう視界を遮るものはない。

どの部屋もベランダが斜面の側にあつて、だから玄関はこちらからは見えない。それでも窓やベランダが規則的に並ぶ様子から何戸あるかは数えられる。いちばん手前の建物は三階建てで、ベランダの区切れを見ると各階に四戸あるから、十二戸。その左側にも同じ形の建物があるから十二戸。遠くからだともミノのように間隔を詰めて建っているかに見えた建物と後ろの建物の間には、坂道から櫛状にのびる道路や駐車スペースがあつて、木々を植えて砂場や遊具を置いたちよつとした公園もあるから、建物が向こうに倒れても、一段高いところに建っている建物にはぶつか

りそうもない。ぶつかるほど間を詰めて建ててしまつては、昼のほんのわずかな時間しか日が射さないだろう。

手前の建物がやはり三階建てで一つの階に四戸ある。しかし、その隣に建っている向こう側の列のミノはすこし数えるのがやっかいだ。というのも、この建物の建つ土地の地形が奥行き方向には平らではなく、向こうへ向かつて進むとなだらかな上り坂になっているからだ。手前の建物は一階に四戸あるが、奥に建つ建物のほうは一階に四戸つくろうとすると、いちばん奥の部屋はその上り斜面に徐々にめり込むことになる。だから、二階と三階は四戸ずつあるが、一階部分には三戸しかない。だからこちらは十二戸ではなく、一つ欠けて十一戸ということになるはずだ（二階の四戸目の部屋の真下は何もないのか、それとも何かしらの空間があるのかは、中に入っていないのでわからない）。つまり戸数は単純な掛け算ではなく、どこかしら欠けていたりするので、そこからいくらか引き算することになる。このようにして、歩きながら一棟一棟の戸数を数えている間は、無意識に早足になるように、坂の上までたどり着いたらさすがに息が切れていた。しかも、ミノは手前の列が四棟、向こうの列が五棟だと思つていたら、丘のてっぺんの平らになった土地

には遠くからは手前の建物で隠れていたもう一棟がそれぞれの列の後ろに建っていた。それで数え漏れていたことになる建物の戸数を頭で計算する。世界は数える者のために数えやすく作られているわけではないのだった。

だが、あえて数えにくくするために複雑に作られているということもない。それに世界はどこかで数えやすくできている、いい数え方があるはずだというような信頼が、いろいろなものを数えてきて私のなかにはあるようにも思う。だからこそ、こうして予想に反して数え漏れていたものに出会えると、喜び混じりの驚きが心のかに立ち現れて、またそれ自体がうれしくなってしまうのだから、それは喜ばしいことなのだけれど、驚いた拍子に、私はここまで数えてきた戸数がいくつであったか、途端に忘れてしまったのには少々困ったのだった。そんなことは以前にはあまりなかったような気がして、自分の暗算する力の衰えにも驚かされることになった。とはいえ、憶えている数からいくらか回復することはできる。建物の数は十一棟、ひとつの建物に入っている戸数はとどころいくらか欠けていたとしても十を下回らない。したがって「(したがって)」なんて、数学の証明以外ではあまり言わないかもしれない。いったい何が何によって何にしたがっているのか？、

十一棟×十戸＝百十戸で、少なくともこの集合住宅の集合には百十戸分の住居があることになる。下からの評価だ。どれも家族用の住宅であるようだから、少なくとも二人住んでいるのだとすると、ざっと百十戸×二人で二百二十人がここで寝起きをしている。いや、空室がいくらかはあるだろう。一人暮らしであったり、そうかと思えば子供がいたりもするだろうからこれはそう簡単にはわからないかもしれない。それでも先の見積もりと一桁違うということはさすがにないはずだ。この十一棟の集合住宅に住人がわずか十人ということもなければ、千人住んでいるということもありえない。概算はこんな感じ、だいたいこのアンザンである。別に一戸、一戸にお中元の品物を用意するわけではない。だいたいの数が掴めればいいわけだ。

と、こう書いているとまるで私が数えてばかりいるようだが、そして事実それはそれほど間違っていないのだが、だからと言ってもちろん、数えてばかりいるわけではない。今ではごく限られた日数だけになってしまった新緑の気持ちのよい気候の日であったが、丘のてっぺんの建物と建物の間のミニ公園のベンチに座って、これから手をつける仕事のために建物やこの丘の上の様子をメモを取っていると、時折びゅんと強い風が吹いた。これだけ強い風が吹くとなると、洗濯物なんか

がベランダから飛んでいくこともありそうだと、この住人でもないのに余計な心配にも思いが及ぶついでに、ベランダを見ると、古いマンションにありがちな建物の外側に出っ張るような形ではなく、建物の柱の内側に作り込まれたような構造をしていて、そこに洗濯物が干されている。これなら強い風が通り抜けても、洗濯物を奪い去っていくことはないのかもしれない。頭上を見上げると、高い位置に送電線が渡されているのが見え、道路の奥にあるもう一つの建物の後ろの丘のいちばん高い位置に立つ巨大な送電用の鉄塔が見えた。

そんなこともメモを取りながら、さっきの戸数を数え上げていた時のように最近すっかりこうした暗算がまえのようににはできなくなってしまうことに考えをめぐらせた。物心ついた頃から、何をやっていても、それと並行して頭の片隅でものの数を数えて生きてきたから、それも暗算でやってきたのだから、それがうまくできなくなるということは、視覚でものを見るのと同時におおざっぱな量で捉えることができなくなったことに等しい。それは世界が前よりもぼやけて見えるような感じなのだ。

何枚か写真を撮っていると、そこに坂の下から、ブーン、ブブーンとアクセルを

強めてバイクが上ってきた。ノートから顔を上げてそちらに目をやると、坂から建物の前へと櫛状に延びた道路に赤い郵便配達員のバイクが入ってきた。配達員は丘のてっぺんの建物の前にバイクを止めて、階段をのぼっていく。停めたバイクの後ろのカゴには、蓋が閉まりきらないほどの郵便物が積まれている。速達かあるいはレターパックか、ドア越しに郵便物を渡してガタンと重たいドアが閉まる音がして、配達員が階段を下りてくる。一階にある郵便受けに、郵便物を投函していき、手にハガキが何かの紙片を持ったまま、もう一つの階段の下にあるもう一つの郵便受けへと配達員は向かった。そこにハガキを投函しようとしたときのことだ。ビュンともう一度この丘の上を強い風が吹いた。一瞬遅れてザザザッと丘の上や斜面の木々の葉が鳴る。同時に、配達員の持つ一枚の葉書がその葉たちの元に合流しようとするかのように、手を離れて舞い上がった。ありやうや、という配達員の声が聞こえたかどうか。しかも、その葉書はなぜかベンチに座ってメモをしていた私の元へと飛んできた。私はそれが地面に着地する直前にすっと手を出して掴み、追いかけてきた配達員に手渡した。無言で渡すのは憚られて、

「ここは風が結構強いですね」

代わりに読む人の本

青木淳悟 9年ぶり小説集

憧れの世界

—— 翻案小説を書く



三島賞作家・青木淳悟はなぜ『耳をすませば』の翻案をくり返すのか？

舞台は1995年、主人公は受験を控えた中学三年生。読書に夢中の少女はくり返し図書館へと出かける。ついに書かれた青春小説。ジブリアニメ『耳をすませば』に材をとるふたつの翻案小説「憧れの世界」、「私、高校には行かない。」を書き、書き換えつづけた著者。くり返される翻案を通じて、著者は何に直面し、何を考えていたのか。併録するエッセイではその創作の過程が明らかになる。

四六判並製本 268頁

定価 1100円＋税

ISBN 978-4-9910743-7-0

C0093 代わりに読む人刊



ネットストア
購入ページへ

友田とん

先人は遅れてくる

パリのガイドブックで東京の町を闊歩する3

ISBN978-4-9910743-6-3

新書判並製本カラー 144頁

定価 1700円＋税

友田とん

パリのガイドブックで東京の町を闊歩する2 読めないガイドブック

ISBN978-4-9910743-1-8

新書判並製本カラー 94頁

定価 1500円＋税

わかしよ文庫

うろん紀行

ISBN978-4-9910743-3-2

四六判上製本 204頁

定価 2200円＋税

佐川恭一

アドルムコ会全史

ISBN978-4-9910743-4-9

四六判上製本 444頁

定価 3100円＋税

友田とん 編

代わりに読む人0 創刊準備号

ISBN978-4-9910743-0-1

四六判変形並製本 222頁

定価 1800円＋税

友田とん 編

代わりに読む人1 創刊号

ISBN978-4-9910743-5-6

四六判変形並製本 224頁

特集…矛盾

定価 2000円＋税

全国の書店でご注文いただけます。在庫状況により1週間～10日ほどお時間をいただく場合があります。お近くに見当たらない場合は、代わりに読む人のネットストア (<https://kawariniyomuhito.stores.jp/>) もご利用ください。

試行錯誤 既刊

試行錯誤 1 2023年11月刊

わかしよ文庫 大相撲観戦記
陳詩遠 ながんだか

伏見瞬 蓮實重彦論

友田とん 取るに足らないものを取る

試行錯誤 2 2024年3月刊

伏見瞬 蓮實重彦論

『リュミエール』から読む「過去の現在化」

わかしよ文庫 大相撲観戦記

大相撲を観るようになったわけ

陳詩遠 ながんだか

詩情、菌茎に埋もれて

友田とん 取るに足らないものを取る

流星のごときケーキの手提げ



1：文庫判 56 頁 900 円 + 税

2：文庫判 60 頁 900 円 + 税

試行錯誤 3 2024年6月刊

わかしよ文庫 大相撲観戦記 相撲に熱中できない
—— 寺山修司の世界からやってきたお相撲さん

【新連載】スズキナオ 谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する 生家の跡地でしゃぶしゃぶを

伏見瞬 蓮實重彦論

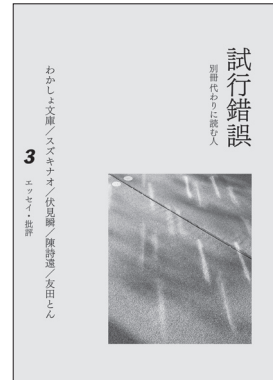
蓮實重彦と生活する

陳詩遠 ながんだか

走ることと金を失うことから身を守っている他

友田とん 取るに足らないものを取る

事務所、借りるかもしれない



文庫判 86 頁 1,000 円 + 税

試行錯誤 4 2024年9月刊

陳詩遠 ながんだか

祭典・採点

わかしよ文庫 大相撲観戦記

大関の書いた小説を探して

スズキナオ 谷崎潤一郎のことを考えながら散歩

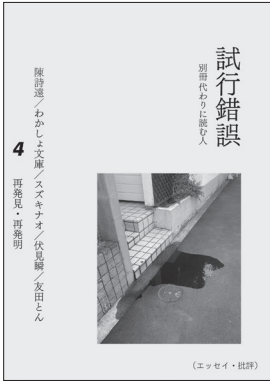
する 暑い銀座のドイッビル

伏見瞬 蓮實重彦論 書籍版『蓮實重彦論』の構

想をそろそろ本気で考えてみる

友田とん 取るに足らないものを取る

ワークシヨップ



文庫判 76 頁 1,000 円 + 税

試行錯誤 5 2025年3月刊

スズキナオ 谷崎潤一郎のことを考えながら散歩
する 吉野で一つ柚子をもらう

わかしよ文庫 大関の書いた小説を探して

伊勢ノ濱復活なるか？

伏見瞬 蓮實重彦論

蓮實重彦の「運動」をあらためて考える

友田とん 取るに足らないものを取る

なんなら副産物狙いでも



文庫判 72 頁 1,000 円 + 税